解説

今崎暁巳

一

日本においては、事実を事実として表現する分野としての、ルポルタージュそして、ノンフィクションについては、基本的人権、婦人参政権、表現の自由、労働基本権など、第二次世界大戦後、民主主義的憲法が成立し、たたかいによって社会生活の中に民主主義が定着し、育つ中で、今、初めてのびやかにその可能性を実現し始めたといえるのではないだろうか。

とりわけ、人間の自由と民主主義、その観点からの社会発展にかかわるルポルタージュ、ノンフィクション文学の世界でその現象が際立っているといわなければならない。

次巻でとりあげる、風刺漫画家柳瀬正夢が関東大震災亀戸虐殺事件と三・一五事件を結んで書いた〝狂犬に噛まれる〟（戦旗一九二八・十月号）の一行一行をたどり××の意味を考えながら、胸の底からこみあげてくる熱い思いを抑えることができなかった。

「南葛の同志等が亀戸に殺されたのはいつだったか。
朝鮮と支那の、無産大衆の屍体数千個が焼土のハシバシに棄てられてたのは、

大杉夫婦、宗一少年の絞殺体が井戸底から、掘り出されたのは、
サムライ帝国の『白色テロ』が銃剣とサーベルと日本刀を血に濡らし乍らのさばり歩ったのは、」
私たちは、秦の始皇帝やヒットラーが行った焚書の歴史的事実を聞いてきたけれど、半世紀ほど前に、日本帝国の役人軍人が情容赦なく、日常的に作家記者の文章を切り刻んだ伏字の印刷物を目にする時、この国に事実を事実として表現し、自由に豊かに人間を描きうたいあげる方法が育ちにくかった最大の理由を見る思いがする。
明治維新から第二次世界大戦終結までのほぼ八十年の間も、経済的にはヨーロッパが、ルネッサンス・産業革命を経て五百年かかって到達した資本主義生産のレベルを実現したけれど、その、世界に例をみない、天皇制を軸とする強烈な経済的政治的軍事的集中、統制の中で、自由と民主主義の育つ社会生活が常に管理され、圧殺されつづけてきた状況が、私たちにとって一層鮮烈である。
一方では、ヨーロッパで花開く資本主義、ブルジョア民主主義の制度、技術・文化を吸収するのに忙しく、同事に、秩父困民党事件から佐賀の乱、西南戦争に到る、維新政府確立期の自由民権圧殺の状況は、日本帝国憲法をもつ歴代政府の反民主主義性、反人民性とともに、あえて比較できる先進国としてはヒットラー・ファシズム体制に進んだドイツのそれ以外にはない。
そして、日本に芽生え育ち始めた民主主義・社会主義の運動を抹殺する意図をもった大逆事件のデッチあげが、その後、第二次大戦後までつづく、官憲による〝政府転覆〟を理由とする冤罪事件づくりの第一歩になった事実も、日本の表現の自由受難を考える上で忘れることができない。
「『二人だけが生きる生きる』『あとはみな死刑だ』『ああ二十四人！』そういう声が耳に入った。『判決が下ってから万歳を叫んだ者があります』……予はそのま、何も考えなかった。ただすぐ家に帰って寝たいと思った。……帰って話をしたら母の眼に涙があった。『日本は駄目だ』そんなことを漠然と考えながら丸谷君を訪ねて、十時頃まで話した。」
歌人石川啄木の日記に刻まれた言葉が、庶民の母親に涙させる事実の重み、人の痛みを伝えてくれる。明治期四十

余年の間に〝つくられた天皇制〟の権威の下、怒りつつ、嘆きつつ、声を封じられていく庶民のうめきが、聞えてくる。

さらに、僅か十数年の自由と民主主義への努力の結実の中で、労働組合誕生、日本共産党設立まで進んだ人民連帯の成長を、まさに剣と暴力をもって官憲が圧殺行動にでた大正末期から昭和初期の状況。

関東大震災のただ中、家を守り、人を救うべき、軍隊、警察、消防、自警団の男たちが流した流言は、

「社会主義者や朝鮮人が火をつけている」

であり、暴力行為で殺された朝鮮人六千人、中国人百七十人、日本人五十九人という事実がその後の調査で明らかになっている。

小林多喜二は、小説『一九二八年三月十五日』の中で、自らの体験、痛みを通して、日本の支配者官憲による自由と民主主義圧殺の現実をえぐった。

「渡は、だが、今度のにはこたえた。それは畳屋の使う太い針を身体に刺す。一刺しされる度に、彼は強烈な電気に触れたように、自分の身体が句読点位にギュンと瞬間縮まる、と思った。彼は吊されている身体をくねらし、くねらし、口をギュッとくいしばり、大声に叫んだ。『殺せ、殺せ――え、殺せ――え!!』」

ヨーロッパ五百年の進歩発達の歩みを数十年に圧縮して実現しようとする帝国主義日本の社会および人間生活の変化は、ヨーロッパ百年の生産力拡大を十年で実現する労働者農民の文字通り生命を賭けた能力発揮の面でも、また急速に目覚め成長する人民連帯に対する権力の抑圧の面でも、古今東西に例をみない、凄まじいテンポ、残酷極まる様相を呈して進められた。

従って、明治、大正、昭和初期と、六十数年の間に、軽工業から重化学軍需産業へ、原始蓄積から独占資本形成へと、産業、労働現場、市民生活のありようが急変する過程で、その実情をとらえ、表現する報道、文学の盛衰も、じっくり芽生えさせ、育てる状況もゆとりもないまま、荊の開拓の道を歩んできたというのが、偽りのない現実だった。

まず、事実を人々に伝える、ノンフィクションの原点である、現実はどのようにあるかを描くことから、明治中期、末期の市民生活・労働現場の報告が始まったことは間違いない。

この巻に収める、主として、大正初年労働組合運動創生の時以前の、特徴的な作品傾向について触れておくと、それは端的にいえば、日本における資本蓄積の過程、実態がいかにひどい非人間的無権利状態におかれていたかの報告につきるということ。

明治期における労働市場形成・労働現場の実情がどれほど劣悪極まりないものであるかは、今でいう政府報告書である農商務省文書『職工事情及付録』によって事実を伝えられ、資本主義化される下層市民の生産消費両面からの生活を描く、横山源之助『日本之下層社会』とともに、初期資本主義成立期の実情を伝える代表的作品となっている。この二作が、日本における労働者階級形成の実態を、その生産、生活両面から総合的に描き、やがて、労働組合運動創生期を迎え、紡績産業における労働現場の実情を明らかにした大作『女工哀史』誕生に発展していくことになるのだ。

なお、この時期の民主主義運動形成にあたり、労働現場、家庭地域をつなぐ人間生活全般の民主化という点で、一冊をあげれば、福田英子の『妾の半生涯』をあげたい。日本の民主化を目指す自由民権運動内部にあった、古き封建男性社会の名残りの指摘から、出産・育児・労働と女性の自立解放に向う先駆的努力を描いたこの作品は、生産、生活両面から急速に日本独自の民主主義を拓く一里塚として、多くの課題を示してくれる。

こうして、明治期から大正期にかけ、誕生し育ち始めた、日本の労働、生活を描くノンフィクション作品が、まず、資本主義的支配の矛盾欠陥がどのようにあるかを描きだすことで、最初の社会的役割を果たしながら、同時に、第二の課題である、なぜ、どのようにして、そうあるかを追求する仕事を、事実にそくして完成させることはほとんど不可能であったことを認めざるをえない。

例えば、今ならば手段、方法は問わず、独占企業体を名指しで、その労働者搾取管理の実態をつき、軍事産業化の内実を社会的に暴くことも、その事実の信憑性さえ証明できれば、権利として保証される。だが、当時は、それは天

皇と日本帝国のタブーに挑むことであり、いかにして支配するかを衝くことは、大逆事件や共産党弾圧事件の現実に直結することを意味していたのだ。だから、当時、日本社会の反民主主義的ファッショ的現実を描き、人間らしいたかいと生き方を、たとえ伏字にされようと、かろうじて描き形象化することができたのは、虐殺された小林多喜二など、プロレタリア文学運動に参加した作家たちの小説、フィクションの世界だったといわざるをえないのである。

私たちは、戦後四三年の民主主義定着とともに、ようやく、ルポルタージュ、ノンフィクションの可能性が今、広く深く切り拓かれようとする時、事実を事実として表現することがほとんど不可能であった日本帝国主義形成期に生命をかけ生活をかけ人間らしく生きる日常をとらえようとした先人たちの仕事と役割をしっかりとらえたい。現在における、私たちのルポルタージュ、ノンフィクションの役割が、現実がどのようにあるか、なぜいかにしてそのようにあるかを明らかにするとともに、その現実をいかに民主的に人間らしく変革するかを描く時に来ていることを念頭におき、先人たちの足跡を見つめたい。

二

最初にとりあげる、四つの作品は、短いけれど、それぞれ、日本の労働者の生活に初めて光をあて、やがて、労働組合の誕生へと発展する、最初の人間的告発、社会への問題提起の意味をもった、新鮮な状況報告であり、エッセイだったということができる。

明治期、資本主義形成期の公害事件として知られる足尾銅山鉱毒事件にかかわる作品は、報告、記事をとわず事件や人間を事実として描くのでなく、怒りや憤懣の心情的吐露の性格が強かったのだから。

前述した大逆事件により、労働者の言論・行動の自由が脅かされる中で、明治四十五年に、東京市電の大ストライキが発生したのを皮切りに、大正年代に入ると、量質ともに急速成長をつづける労働者の間に、権利への目覚め、労働組合設立への努力が、年を追うごとに高まっていった。

すでに、明治三十年代に日本の初期労働運動の育ての親といわれる、片山潜や高野岩太郎らによる、労働組合期成会や協同組合づくりが実行されたけれど、〝労働組合死刑法〟と言われた治安警察法によって、組合結成だけで犯罪者として逮捕される弾圧の嵐を初めから体験したのだ。

従って、明治四十五年に東京で結成された、たたかう労働者組織〝友愛会〟の成長を経て、多くの労働組合の設立、第一回メーデー開催が実現するのは、一九一九年（大正八年）から二〇年――明治政府が生まれて、半世紀以上経って、初めて、日本に組織的労働組合運動が社会的勢力として国民の前に現れたということができる。忘れてはならないのは、この間に、日本の資本主義は、一八九七年（明治三十年）に七千三百二十七工場、労働者数四十万人（うち二十六万は女工）から、日露戦争を経て、一九一四年（大正三年）に三万二千工場九十五万人へ、そして、第一次世界大戦を経て、四万四千工場、百六十二万人へと、世界列強に肩を並べる生産大国に成長した事実――とりわけ、紡績、製糸など軽工業とともに、製鉄、造船、機械生産など重工業部門を軸に、三井、三菱、住友、安田など四大財閥中心に、独占資本主義体制が確立したのがこの時期だったことを指摘しなければならない。

宮嶋資夫は、この労働運動黎明期に生まれた大正労働文学を切り拓いた作家の一人といわれ、代表作として、彼が水戸のタングステン鉱山で働いていた体験をもとに書かれた小説「坑夫」（一九一六年）があげられる。

彼の出身は、明治政府役人の父、元幕臣の娘である母ということで、むしろ、恵まれた階級階層に属していたけれど、父親の没落の影響で、小学校を卒業し小僧奉公をすることから始まり、手内職、牧夫、坑夫など数多くの職業を経験する中で、次第に、日本の労働者がおかれている労働条件の悪さ、労働環境のひどさに眼を開き、労働組合運動への情熱を軸に執筆活動をするようになったのだ。

一九一四年（大正三年）に、無政府主義者である大杉栄・荒畑寒村たちの雑誌『近代思想』に近づき、サンジカリズム研究会に参加する頃から、急速に、労働者の実態を描く作品活動が本格化していく。

彼は、その後、辻潤たちダダイズムのグループに加わり、やがて、一九三〇年には仏門に入る変身をすることにな

るが、『近代思想』に、ここでとりあげた二つの報告を書いた一九一五年のころは、翌年発表し、ただちに発禁となった「坑夫」の創作をはじめ、最も意慾的に、創作、社会活動をすすめていた時期である。

「職業病」の内容で驚くことは、一九一五年、独占資本が成立する段階に到達しているというのに、日本の政府、研究機関に、まだ労働者の労働状態についての衛生統計が存在せず、職業病に関する保護はもちろん、その概念すら確立していなかった点である。後に「女工哀史」などで明らかにされる紡績女工などの職業病、肺結核も外国では設備を整え、職業病といえない少数なのに、日本では、五十万の職工のうち、一年に五千人が死亡するという凄まじい状況なのである。

そして、「労働者の傷害」についていえば、一九一三年（大正二年）だけで、死者七三〇人、重傷者九八九人、軽傷者一三万三七九三人ということで、実に、二十六万余の全鉱山労働者の半数をこえる人たちが、負傷するという、なんとも恐ろしい現実。

私たちはあらためて、僅か七十年ほど前に日本独占資本がどんな風に人間の労働・生命を扱っていたかを見直すことである。

一九二二年（大正十一年）四月号に掲載された、天川佐吉郎の「小作人の生活」は、短い文章であるが、宮嶋の労働者の状況におとらず、当時の小作農民のおかれた、現代の奴隷農民というべき、地主による搾取の実態が紹介されている。

三人の地主から六反歩を借りている小作農が納める小作米が八石四斗。苗代代、種子代を差しひいて残るのが三石五斗しかないという、このなんとも凄まじい関係。

そして最後に読んで下さいと紹介されている〝田地小作証券〟には、こんな条文まであるのだ。

「一、不可抗力ニ依ル凶作ノ場合ト雖モ前項ノ小作米ハ支払可致候事」

労働者の人権生活権が確立されていない状況と重ね合わせるなら、日本のブルジョア民主主義革命の性格もある明

治維新歴代政府による制度改革の中身が労働者農民市民の解放の点でいかにヨーロッパ諸国のそれに劣っていたか、理解できるであろう。

麻生久は、一九一七年（大正六年）に東京帝国大学法科を卒業し、新人会の結成に参加し、東京日日新聞の記者となって、一九年（大正八年）に友愛会のメンバーになった頃から、労働運動社会運動に加わることになる。

とりあげた「日立鉱山事件入獄記」は雑誌『解放』の一九二〇年七月、八月号に連載された作品で、友愛会会員として、日立鉱山支部の幹部とともに、会社の弾圧に抗議して、逮捕入獄させられた事実を体験ルポルタージュとして書いたものである。

友愛会について触れると、前述したように、大逆事件の二年後、東京三田の統一キリスト教弘道会図書室に集まった、電気工、機械工、畳職、塗物職、牛乳配達、撒水夫など、十五人のメンバーと、元朝日新聞記者で、機関誌『六合雑誌』を編集する鈴木文治を中心に結成された、労働者の権利意識を育て、労働組合づくりを目指す、労働団体ということである。鈴木文治はいった。

「幸徳事件からようやく二年、官憲の圧迫はつよく、まだ労働問題にたいする世間の理解力もきわめて低調である。まずこうした穏健な団体をつくり、実力を養成してから労働組合へすすむほかないと思う」

困難な状勢の中で、鈴木文治の「資本と労働の調和」という、資本の温情主義を求める考え方を前面に活動が始まったけれど、アメリカの労働運動の影響をうけ、慶応大学を卒業した野坂参三らが友愛会本部に入る中で、次第に労働組合としての体質をもつようになっていった。宮嶋が「坑夫」を発表した一九一六年（大正五年）には、友愛会の最初の職業別組合である東京印刷工組合が結成されることになった。そして、第一次大戦、ロシヤ革命、米騒動と、国内外の大きな社会変動を体験する中で、労働者の意識は急速に高まり、麻生久が逮捕入獄させられた一九一九年（大正八年）はめざましい労働組合運動躍進の年となった。前年末は十一に過ぎなかった労働組合数がこの年一気に七十一組合となり、翌一九二〇年も新たに八十一組合が結成されることになったのだ。

「日立鉱山事件入獄記」は、日本で初めて労働組合活動が労働者一人ひとりの行動になっていく中で起こる会社、官憲、労働者自身の実態を知る上で、貴重なルポルタージュである。穏健な労資協調の労働団体である〝友愛会〟会員であるということで、百数十人の社員を首切った久原経営主を先頭とする日立財閥の冷酷無比の労働者対策。官憲にはためらいがあり、帝大出の東京日日新聞記者であったエリート友愛会員麻生久の扱いに迷い、警察署長が『今度は飛んだことで』などと挨拶するようなまだ弾圧慣れしない時期の様子が面白い。

国家が大逆事件をつくりあげ、天皇と国家の権力を国民に自覚させる行動をとったように、まだ、当時は官憲の中にも、天皇や資本への崇拝も、労働組合への弾圧意識も定着しきっていなかったことが類推できる。

里村欣三は、本文学集・10でも津田孝氏が書いているように、一九二三年（大正十二年）から十二年間、徴兵忌避者として公には行方不明ということで生活していたという、軍国主義日本において、特異ではあるが、一つの人間らしい主張をもって生きた作家ということができる。

その代表作「苦力頭の表情」について解説する中で、津田孝氏は「労働そのものから自由になりたいという意味での『放浪の自由』が謳歌されている」と書き、山田清三郎氏は「働くものの夢をもった放浪性があり、その夢が、ルンペンへの転落と虚無主義からかれをすくい、労働者階級の理想への眼を失わせなかった」と紹介したが、確かに、どん底生活に生まれ、あらゆる人生の貧苦を体験して成長し、満州放浪から徴兵忌避へと一貫して、貧しく働き生きる人々の周辺で暮らし、書くことをしてきた里村欣三の人間らしさは、当時の帝国主義軍国主義日本の現実に、小さいがほんのり暖い灯をともす役割をもっていたに違いない。

雑誌『文芸戦線』一九二四年（大正十三年）十一、十二月号、一九二五年八、九月号に連載された「富川町から（立ン坊物語）」は、その貧しく働き生きる東京の新しい下層住民の住む町に焦点をあてたルポルタージュ的エッセイである。

彼が歩いてきた底辺の暮らしを見る人間らしい眼と批判精神が、この資本主義東京がつくりだした新しい貧民街を

とらえる上で生きているといえる。

「同じ『立ン坊』でも、その時分には皆、長屋に住んで蝉も餓鬼もあったものだよ」。

彼は、生産力があがりながら、仕事、暮らしの面では、江戸から明治初期の職人たちの暮らしの方が、貧しいなりに一戸構えの長屋に住み、ゆとりがあったというのだ。経済成長を日々の働き方、暮らし方のゆとりにみる、このリアリズムは、そっくりそのまま、現在の高度成長東京の暮らしを見る上でも、第一に必要な姿勢である。

当時の日本帝国が国内外に作りだしたアジア支配の差別用語が、ヨボ・琉球・チャンコロ・台湾とそのまま紹介され、この富川町の木賃宿につどい国際的底辺労働者の人間関係を見る眼は彼の国境をこえたヒューマニズムの視点が貫かれている。「沢庵の尻尾をかじって」安い賃金をさらに安くしてしまう朝鮮人労働者のことを書き、その本質を「賃金問題の上に生ずる人種排斥」と指摘する眼も冷静である。彼の主張は、〝哀れでも〟〝見すぼらしくても〟〝人種の区別を超絶するインターナショナリズム〟にあるのだ。

三

大正年代、第一回メーデーの行われた一九二〇年（大正九年）ころまでが、日本の独占資本主義体制が確立していき、ようやく日本に初めての労働組合組織、日本労働総同盟が誕生していくまでの生みの苦しみの時であったとすれば、その後、二〇年代大正末年から昭和初年にかけての一年一年は、難産の末に生まれた日本の労働組合運動、社会主義運動を育て広める間もなく、官憲、軍隊総がかりの弾圧の嵐に、最初から立ちむかわざるをえない状況に直面していった。

やっと労働組合が市民権を得始め、自分の頭で労働と暮らしを考えられるようになり、巷でも、浅草の活動写真やオペラやカフエが庶民の楽しみになり始めた眼の前で、ふたたび、大逆事件の悪夢が国民につきつけられた。関東大震災の苦しみのただ中で、〝朝鮮人と社会主義者〟が放火し、煽動するという理由で、数千人が虐殺される状況がつ

くられたのである。そして間もなく、先頭に立ってたたかう、生まれたばかりの日本共産党員に対する仮借ない弾圧、すべてを天皇と日本帝国への反逆の視点で断罪する治安維持法の成立と、まさに一気呵成に侵略戦争を進める国民生活づくりにつき進む時代となったのだ。

ここにとりあげる、細井和喜蔵、藤森成吉、佐倉啄二による三作品はそれぞれ、身をもって、労働現場を体験し、書かれた、一九二〇年代日本の労働生活についての本格的ルポルタージュである。そして、関東大震災における弾圧や報道規制の状況はあっても、一九二七、八年の官憲による出版の検閲・規制が公然と行なわれるようになるまでの、僅かな表現の自由が残された時期に出版され、改造社など、良心的出版社、著者たちの努力で陽の目をみることができたのだ。

その意味で、大正デモクラシーと日本労働運動黎明の時に、日本資本主義の労働者支配があまりにも残酷かつ非人間的である事実を、作家の立場から人間として問いかけ、後世に伝える、記念碑的ルポルタージュの仕事となったということができる。

細井和喜蔵は、僅か二十八歳の若さで、短くとも集中し、燃焼しつづけた人生を閉じたけれど、十三歳から世の中に出て働きつづけた厳しい労働生活の中で、驚くほど、多くの仕事をし、優れた小説、評論、詩の作品を残している。十三歳の時の桟屋の小僧から始まり、別の桟屋、電機会社の油差し、いくつかの大手紡績工場、さらに、夜の職工学校での技術資格をとるための勉強と、まさに、当時の十二時間をこえる現場労働の日常を人並み以上に体験し、肺結核や痔ろうにも苦しみながら、なお、〝文学・芸術こそ再生の道〟と、二十三歳から寸暇を惜しんで、執筆活動を中心にすえるようになった、ほとばしるような、その人生と仕事。彼の、東京と関西を往復し、働き、失業し、結婚し、ひたすら、執筆をつづけた期間は、一九二〇年（大正九年）から急性腹膜炎のため亡くなった一九二五年八月までの、僅か五年の月日に過ぎないのである。「女工哀史」を書き始めた頃も、関東大震災に出あい、弾圧の危険をさけ、妻堀としをと一緒に、兵庫県の猪名川上流にあった製鉄所で共働きしながら、仕事をつづけた。

和喜蔵が詩、小説を書き始めた時期は、アナルコサンジカリズムや〝アナ・ボル論争〟など労働組合運動と革命運動の関係をめぐる論争が激しく行なわれている時期で、彼もさまざまな先輩たちの影響や働きかけを受けたことは間違いない。

だが、彼は、大先輩堺利彦から『種蒔く人』同人を紹介され、詩同人誌『鎖』では、後に日本共産党員になるダダイスト陀田勘助の影響を受けていたことが、一筋に労働者の現実を書きつづける上で、大変大きな力となったといえる。さらに、和喜蔵を励まし、小説を書くことをすすめるとともに、自ら、東京帝大卒、著名な作家の立場をこえ、労働者階級の誕生成長に希望をもって働く藤森成吉と出会ったことも、「女工哀史」誕生にとりわけ大きな力となった。

和喜蔵がその豊かな才能の開花で、優れた小説、詩を書き残しながら、今なお、彼の名前を人々の中に広げつづける作品が「女工哀史」である理由は、彼の〝自序〟の一節が、見事に語っている。

「婿養子に来ていた父が私の生れぬ先に帰って了い、母は七歳のおり水死（自殺）を遂げ、たった一人の祖母がまた十三歳のとき亡くなったので私は尋常五年限り小学校を止さなければならなかった。そして十三の春、機家の小僧になって自活生活に入ったのを振り出しに、大正十二年まで約十五年間、紡績工場の下級な職工をしていた自分を中心として、虐げられ蔑しまれ乍らも日々『愛の衣』を織りなして人類をあたたかく育くんでいる日本三百万の女工の生活記録である。」

この一度だけ区切られた、二つづきの文章の中に、彼の人生のありようと書く目的のすべてがこめられている。とりわけ、日本における労働者階級の状態を描き伝えるには、まず、自分の短い半生をかけ、妻ともめぐりあった紡績工場の〝女工〟を〝哀史〟として書きつくすことにすべてをかけたというべき、精魂傾けた、材料の蒐集、体験、執筆への集中が、〝気負い〟を通りこし、文章の生命となって、随所に光彩を放っている。

日本における労働者搾取の最大の被害を、まず、圧倒的多数の〝女工〟労働の現実に見、そこに研究、描きつくすことに短い人生をかけたことが第一。そして、その仕事をする彼の姿勢を、自らを書く人間とせず、女工とともに、

同じ思いで、疑問ももたずに働き、生きた一人の人間の立場としたことが、「女工哀史」を、六十年をこえて今なお、人の心を動かす優れたルポルタージュ作品としている第一の理由である。彼は書いている。

「その圧制な工場制度に対して少しの疑問をも懐かずに、眼をつぶって通って来た狭隘な見聞と、浅薄な体験によって綴ったものが即ちこの記録である。私は大工場生活には入った初めから、これを書くために根ほり端ほり材料を蒐めて紡績工場を研究したのでは決して無い。」

「女工哀史」のルポルタージュとしての弱点、細井和喜蔵の機械や資本主義に対する考え方の問題点を指摘されることもある。

確かに、機械が人間生活を不自由にし、創造や成長を妨げるような使われ方への不信を表明する文章に出会う。機械に片腕をとられた男を主人公とする短編「或る機械」では「五十年以前は、こんな怪我人が果して幾割りあったであろうか。それを考える時、世が文明になればなる程、貧乏人は不幸になることを何人でも考えられるでしょう。」と書き、「女工哀史」では、

「工場とは永遠に、科学と創造の矛盾を繰り返えす処であった。

近代工業は徹頭徹尾『加工』に過ぎない。工匠は永遠に創造の喜びを失い、マシン油と燃料より以上のものを喰わねば動かぬ、彼等資本家より言わしむれば『不経済な機械』に過ぎないだろう。」

と表現した。そこには、「機械」が人間を支配し、「文明」が人間を不幸にするというとらえ方があり、文学集・7で小林茂夫氏が触れた、小林多喜二の「機械の階級性」(三〇・一)にいう、「資本主義社会の『魔術性』をとらえる「プロレタリア・レアリズム」が不充分ということはできるだろう。

だが、小林氏も、和喜蔵の「機械」論を先駆的位置においたこととともに、「女工哀史」の各章が、女工募集の人身売買的手口の追及から始まり、労働、職場環境、衛生、宿舎、休暇、私生活などなど、職場・家庭・地域を貫く労働者の人間としての暮らし全体に光をあてた総合性豊かな人間性こそ、生まれたばかりの日本の労働者階級の現実を人々に伝えるルポルタージュに必要な第一条件を立派に結実させている事実が、なによりも大きな成果なのだ。女工

を「社会の礎となって黙々と愛の生産にいそしんでいる『人類の母』」と呼び、その母が「自からの体を破壊に陥し入れる犠牲を甘受」させられている生活の現実を、一つ一つ、自らも生命を削り、「生きるが為めにはみんなで死のう」の思いでとらえ、描ききったリアリズムと豊かなヒューマニズムこそ、「女工哀史」の不滅の生命なのだ。

「女工哀史」から六十有余年、私たちは、高度成長から情報化社会に向い、高度に発達した資本主義社会の矛盾と対峙して生きている。物が溢れる生活になりながら、コンピューター作業や長時間労働の現場で、やはり、女子労働者が働きつづけられず、一生働いても東京では家を持てない搾取支配の状況に直面している。この、〝現代の貧困〟が問題になる状況を解決するために、この「女工哀史」が職場・私生活を貫き全面的社会的に労働者をとらえようとした姿勢方法を「女工哀史」の原点に戻って見直す必要を感じる。つぎにとりあげる、藤森成吉が「狼へ！」の中で随所に鋭く提起している、人間生活の豊かさの観点から労働と暮らしをとらえる視点とともに、現代の職場労働をとらえる上でも必要な、極めて重要な問題提起が、すでになされていたということではないか。

藤森成吉の「狼へ！（わが労働）」は二重の意味で大変面白く、日本の民主主義運動労働運動の黎明期における作家・インテリゲンチャの現場体験ルポルタージュとして魅力ある作品となっている。

一つは、ロシヤ革命における「プ・ナロオド」運動の影響をうけ、日本の知識階級が労働者と生活をともにし、新しい価値観をもった生活と仕事と運動を創り出そうと、意識的に、労働現場に入り、労働者とともに働き、ともに生活した点である。

「責任はやっぱり知識階級にかかっている。日本の知識階級が、労働者達から反感を持たれてもやむを得ないのは、彼が彼等のなかにあまりに知識を賣そうと試みた罪からではなく、実にあまりにそれに超越し、又は無頓着すぎた罰だ。一旦労働の世界へ入っている時、如何に知識階級の存在が雲霧のなかに隠没しているか、所謂当代名家達の威張っている文壇などと云うものが、はたしてどこに感ぜられるか。資本家は、まだしも直接彼等に接触している。」

日本の文壇文学がほとんど労働や職場について書かないとともに、作家たちが現実を知らないことを指摘する藤森

の視点は鋭く、一九八〇年代にもその弊害がつづいていることをいう必要がある。私自身、最近、奈良女子大（旧奈良女高師）のいわばエリート女子学生たちが、生協のパンを作るのに、毎朝三時におきて仕込みをし、五時過ぎにかまに入れ焼きあげる労働現場を体験したことで、パン職人の労働に感動し、大企業の商品づくり、流通をきちんと批判するようになった様子をきき、「狼へ！」の役割は、今の若者にも生きていることを知った。

二つ目は、その新鮮で純粋な労働体験、労働者との触れあいから生まれた、この作品のもつ、日本の資本家たちの支配の特徴、そして、労働や労働者の暮らしのゆがみを指摘する中身の豊かさ、面白さである。そこには、今こそ、確立を求められている、あるべき、豊かな労働、生活のキーポイントが示唆されているといって過言ではない。

まず、企業における食生活の貧しさと職業病についての指摘が極めて具体的である。

割麦をそのまま米に混ぜて食べさせるのは野蛮極まる沙汰だといった上で、女工の職業病の第一が胃腸病になる必然性をこんな風に説明する。

「職工達の場合には、時間を出来るだけ短く食う。ぐずぐずしていれば一人仲間はずれになるばかりでなく、仕事におくれたり、休み時間がなくなったり、いい事は一つもない。だから、私なぞから見れば、ほとんど噛んでいるかどうかさえ疑われる位の食べかただ。（中略）職工達のあいだには胃腸の悪い者が端からだ。もう一つは肋膜だ。それは勿論他の原因にもよるが、長くいる者ほど第一に消化器疾患に罹って、営養不十分的青い顔をしている。」

また、織物工場での騒音の凄まじさについて、何年も働いていると、音楽のリズムなんか聞えなくなりはしないかと、質問した時の和喜蔵の返事が、聴覚障害の職業病を的確に証明している。

「自分なぞ、子供の時からずッと紡織工場で働いたせいか、耳が少し遠くて困る。修練の足りないせいもあるだろうが、音楽の面白味なぞちっともわからない。」

日本の労働者の職場環境がどれほど、ゆとりがなく、耳目や内臓の健康が日常的に侵され、職業病を背負うのが当たり前という生活の、なんとも悲惨ともいうべき現実。

日本の労働現場の非人間性を説明する極めつけは、一九一六年（大正五年）工場法が実施され、やっと十二時間に

なるまで、十四時間十六時間労働が日常であった、世界に名だたる、日本式長時間労働の実態。

「例の工場法の適用を受けない小工場では、この千九百二十五年の現在でも、まだ毎朝四時頃から夜の九時頃までわれな職工達を働かせている、と云うおどろくべき事実が厳存する。おどろくべきより、怖るべき野蛮さだ。」

藤森はここで、日本の階級闘争、労働条件改善闘争について、重大な指摘をする。

「搾取という言葉は、今経済学的に概ね労働賃金のそれの意味に使われているが、実際はそれだけではない。（中略）殊に日本での重大な一つは、時間の搾取だ。進んだ国民ほど時間を大切にする。これほどの暴虐な時間的搾取、と云うよりむしろ奪取を平気で許している日本人は、一たい進歩した国民の資格があるだろうか。」

藤森成吉が石鹸工場、北海道の牧畜、東京の豚飼い、織物工場、鉄工場、製糸工場と六つの労働現場を体験した上で、最後の結末に書いていることは、極めて重要である。技術革新が第二の産業革命といわれる段階に達し、生産性の驚異的拡大が実現し、便利な生活財がきめ細かく行き渡った現代においても、ここで提起されている二つの問題がそっくりそのまま生きている事実を、私たちは確認しなければならない。大正年代、全く労働初体験の作家の心身に刻みつけられた、わが国の労働現場における労働者の人間的取り扱いの非人間性が、今なお改善されないでいるという、この「おどろくべきより、怖るべき」事実。

藤森は、第一に、日本の資本家たちが、自由民権の運動や知識階級の自由思想を聞いていながら、「実は封建時代から一足飛びに、現代資本主義へ移っている気がする」といった上で、一人ひとりを人間として大切にする思想が欠けていることに関連していう。

「所謂個人主義乃至自由主義の是非論は措く。一度資本家階級がその洗礼を受けていることは、事実に於てたしかに労働者の為めに幸福だ。日本の労働者は、その点で著るしく不幸だ。資本家達は、今でもなお且つあまりにわからなすぎる。」

そして、第二に、ふたたび、「恐るべき長時間労働」をとりあげ、この体験的ルポルタージュのまとめの言葉として、すべての知識階級の人々に、人間にとっての「閑」の大切さを知っている仲間として、つぎの言葉で結んでいる

のだ。

「諸君の立場を潔める為めに、まず一斉にこの問題の為めに立て！」

私はあらためて、作家藤森成吉が、細井和喜蔵の仕事と生き方にうたれて、自ら一年をかけて体験し、執筆したルポルタージュ「狼へ！」の労働者および労働運動に語りかける先見性に驚き、感動する。搾取の底辺として婦人労働に光をあてた細井和喜蔵と、低賃金以上に、職場における非人間的生活、とりわけ長時間労働とのたたかいを呼びかけた藤森成吉が、日本における労働運動、民主主義運動の黎明期、ファシズム支配体制確立の前夜に、事実に即し、労働現場から、心をこめ同胞に呼びかけた労働者解放人間連帯のルポルタージュの役割は今なお生きている。

最後に紹介する、二人の仕事に触発され、長野県製糸工場の現場から、一九二七年に、『製糸女工虐待史』を世に問うた、労働者佐倉啄二の仕事とともに、日本の労働現場から生まれたノンフィクション、ルポルタージュの最初の消えない峯を形成した歴史的事実を、私たちはまず、きちんと位置づけることをしなければならない。

藤森成吉が自ら骨折った『女工哀史』の出版につづく、あまりにも早過ぎた細井和喜蔵の死の悲しみの中で、佐倉啄二の原稿を目にしたことの歓びを、『製糸女工虐待史』の序に書いている。紡績女工につづき、さらにひどい虐待を受けて働く製糸女工について書きたいというのは、和喜蔵の口癖でもあったのだ。

「女工哀史」に触発され、労働者自らの体験を集大成する大仕事にとりくんだだけに、推薦者の藤森、著名な評論家木村毅が序文で、文章の素朴さに触れている点はあるにしても、「女工哀史」が明らかにした女工虐待の現実をさらに上まわる、信州製糸工女の日常をえぐり出した点で、「製糸女工虐待史」をあわせてとりあげる必要がある。著者はいう。

「女工の悲惨な生活、桎梏、凌辱、殴打、監禁、等々それはそれは世人の到底想像の及ぶ処でない事実―を毎日見せつけられると之れに比べて細井氏『女工哀史』の紡績女工を寧ろ幸福であるとさえ思った。」

佐倉啄二自身が〝下級職工〟として働きつづけた体験が生む、迫力ある虐待の描写をあげよう。まず、山本薩夫監督の「野麦峠」で再現されていた、女工たちを競争させ、生産をあげるため眼の前で成績を読みあげる日常、とりわ

け、成績の悪い者の罰金額を読みあげる状況について書いている。
「一名罰札と云うて、罰金高を記した札紙を日に二三回読む。其の時は、常に静かな工場内は以上にも、静まりかえって、幾人かの女工は不安と恐怖に包まれるのであった。仲には、卒倒せんばかりに青ざめ戦慄いている者さえある。幸い大きな罰が出なかった場合には、読み終ると、女工の顔には一時に血潮がさして、ほっとした喜びの色が浮ぶのだった。それを見ているに、哀れより寧悲痛だ。」
「狼へ！」でとりあげていた、胃腸病が職業病となるひどい食事の状態に関連して、製糸工場のひどさを書いている。
「夏期などは時々腐敗したものをくれる。（中略）夕食は別として、他の食事をとるには、別に時間を与えてなかった。其処で職工は作業中食事の時がくると、吾れ先に作業場から駈け出して、食事をとる、それが熱い飯に汁をかけて、ろくに、咀嚼せずに、まる飲みにする、まだ口に一杯あるのに、無理に後からと詰込むのだ。で口から飯が洩れるので洩れない様に手の平で口をおさえて、又工場に駈け込んで行って、直ちに仕事に取りかかるのだ。為めに職工の殆んどは胃腸を患っている。」
私はあえて、「女工哀史」「狼へ！」「製糸女工虐待史」をつなぎ、食事や時間の使い方など、現代にもつながる要素として、その表現、事実をとりあげた。同時に、〝虐待〟の中身でいえば、小学校も卒業させないこと、外出できず監視つきの、金網宿舎であること、夏は百度以上の作業場で働くこと、そして、男に弄ばれ、僅少ばかりの金を持って帰るか、肺結核で骨になって帰ってくるかといった、まさに、生命と人生そのものをかけた、当時の工場労働の全貌を、この三冊をつないでとらえることで、そこに、日本の独占資本主義が数十年にして、欧米に肩を並べるほどに成長した原動力――日本労働者階級の一人ひとりが血と汗と涙でつづった真実の生活記録を読むことができる。